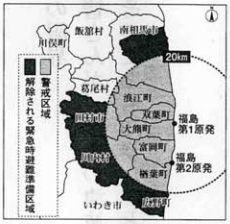
住民わずか300人
原発担当相は福島県に常駐して

―広野町の「いま」
陣頭指揮をとるべし

作家 星亮一



本当に帰れるのか

東京電力福島第一原発から半径20キロ圏の「緊急時避難準備区域」の指定が9月にも解除される。年間の累積放射線量が20ミリシーベルトに達しないと想定される地域である。それはどこかと言えば、双葉郡広野町の全域と南相馬市、川内村など2市1町1村の一部、約6万人が対象である。

問題は除染である。1カ月後に本当に帰れるのか。除染は進んでいるのか。私はその対象の1つ、広野町を訪ねてみた。

私は前日、郡山で友人と食事をした。すると彼がこんな話をした。

「今だから言えますが、私の会社の社員が、あの日、原発で電気関係の作業をしていました。地震が起こり、津波で施設がやられ、大混乱になりました。原発が爆発する、すぐに逃げろと言われ、うちの社員は郡山に戻ってきましたが、そのまま県外に逃げてしまった者もいます。声がわずっていたなあ。私は逃げなかったが、会社は休みにしました」

と言い、「それから」と小声になった。

「原発から逃げる時はパニック状態で、道端にいた人が車にはねられました。しかし助ける人もなく、おいてきぼりにされたそうです」

「それは初耳だなあ」

私はやるせない気持ちになった。瓦礫の下になったり流された家の中に取り残された人が見捨てられた話は聞いていたが、この種の話は何度聞いても胸がえぐられる思いだった。

複雑な思いを抱きながら広野町に向かった。

無人に近い常磐道

郡山から磐越自動車道でいわきに向かい、常磐自動車道に入ると、極端に車が少なくなる。

「全く走っていませんね」

政経東北の佐藤記者もびっくりである。広野で常磐自動車道は通行止めになっているので、当たり前と言えばそうなのだが、無人の高速道を走る感じだった。広野インターで降りると、物々しい警戒だった。10人以上の警官がいて、許可証がなければ20キロ圏内には入れなかった。

その光景を撮影しようとすると、すぐ警官が走ってきた。佐藤記者が名刺を出して、撮影許可を求めてくれた。撮影は自由なのだろうが、一言断らなければならない雰囲気だった。

無人に近い常磐道

交差点にはJヴィレッジの方向を示す看板と、テロを警戒する看板があった。そのコントラストが緊迫感を与えた。

原子力発電所のそばに来ると、やはり緊張する。広野町は冬でも雪の少ない温暖な気候であり、Jヴィレッジの開設後、小規模ながらも浜通り屈指の観光地として知名度を上げてきた。キャッチフレーズは「東北に春を告げる町」だった。

ところが、いまはゴーストタウンである。コンビニも食堂もあらかた休業だった。ただし旅館や民宿は原発や火力発電所の復旧工事の人々で満員だった。メインストリートといっても小さい商店街なのだが、開いている店は2、3軒しかなかった。

町役場はいわき市湯本に移転していたので、ここには留守番の職員しかいないことは事前に知っていた。

Jヴィレッジの方向を指す看板

物々しい警戒のJヴィレッジ周辺

大半はいわき市に避難

この日、職員は数人いただけだった。訪ねたとき、役場周辺の樹木を伐採するかどうか、盛んに話し合っていた。

広野町は放射線量が少なく、私が住む郡山市とあまり変わりはなかった。しかし、樹木は放射能に汚染されている可能性があった。伐採してもそれをどう処理するのか、まだ決まっておらず、伐採はどこの市町村でも頭の痛い問題だった。

役場の職員は親切に対応してくれた。

町の人口は約5500人、町に残る人は約300人、町を出た人は約5200人、このうち約3700人がいわき市に避難していた。

最初からいわき市ではなく、避難所を何度も回った末、いわき市にたどり着いたのだった。

「自分の家ほどリラックスできるところはありません。早くみんなで戻りたいですね」

当直の職員は、そう言ってがらんとした庁内を見渡した。

この後、私たちは町のメインストリートに出かけた。テレビ局のカメラが入り、無人のストリートを撮影していた。

四倉屋精肉店

ふと見ると金物屋が開いていた。家族全員で避難し、店主が1人でこ